

(四) 古城の朝

ピコロの音色に身を任せ

砂上を転がる波の粒

山間の紫の霧の幕は

次第に上がって

限界のない青空が

楽器の音色を飲み込んでしまう

離れ小島の頂に立つ

古城が姿を見せた

裾を払うように霧は晴れ

古城の全身が立ち上がる

その凜々しい白亜の姿を包むように
ピコロの音色が絡みつく

遙か彼方に身を引いたメロデーは
震える旋律に打ち砕かれ

孤灯と共に

島影へ遠退いて行く

鋭い海鳥の声

寂しげな孤島の佇むカンバスを

痛さも忘れて切り裂く

(二〇一九年九月二五日)